

# 芥川だより

発行日 \* 2021年8月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

印刷・発行 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*

## 諦めなければ、夢はかなう



誰しも自分の過去を振り返って、あの時にやめていたら今の自分はないと思うことがあるに違いない。世間的には全く注目されない、いや周りの人ですら気が付かないような些細な事であっても自分にとっては非常に苦しい道だ。コツコツと日々積み重ねるように継続し思いもよらない結果を得て自己満足の陶酔に浸る。

ましてや、オリンピックでの優勝となれば私の想像を超える。「諦めなければ、夢はかなう」と優勝したソフトボールの上野投手は言った。北京オリンピックから13年間、開催種目になることを信じて黙々と練習し続けた選手だけに、彼女の言葉に重みを感じる。

葉に重みを感じる。

私が難病・多発性筋炎を発病して10年になる。難病だから原因・治療方法は確立されていない。素人の私が、唯一出来ることは運動を続け心身ともに健康をつくることだと信じて、退院後、3ヶ月に一度の健診を受けながら毎日運動を続けてきた。誰にすすめられたわけでもなく自分の直感で始めた。全身の筋肉が一部破壊される病だから、最初は歩くのも辛いような有様だったが、年月を重ねていくと身体の細胞が入れ替わったように軽くなると感じる朝がある。こんな不思議な経験を幾度か体験しながら10年が過ぎた。

先月受けた、市の健康診査受診結果通知表が送られてきた。5年間の診査結果が年齢別に記載されている。よく見ると、大きく変化したのは体重、肝機能、HbA1c、血圧、コレステロール。一時は100キロ近い体重で腹囲も100センチ、糖尿の数値も悪くてお先真つ暗だったのだが、見事に变身したのである。入院中から診てもらっている医師も「下村さんは運動してるからなあ」と笑って「何も言う事はありません」と言うようになった。私のように誰かに言われたわけではないが、自分の意思で何かをやり続けている人は多いと思う。ゴールなき道だが継続は力だと信じて続けていきたい。

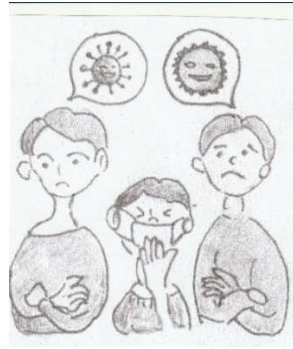
## 死をめぐるあれやこれ(81)

感染爆発に無能な政府

石川 吾郎

前回のこの欄で、コロナ禍でのオリンピックの強行が山岳遭難のパターンだという野口健氏のアピールを紹介した。八月の下旬、変異型コロナ株の爆発的な感染で状況はその通りになっている。特に首都圏の医療体制は危機的な状況だ。◆そんな中、政府と東京都はコロナ中等症は入院でなく自宅療養でとの方針を打ち出した。コロナ治療の第一線で医療に携わる倉持仁医師はこの方針に対し「国民にまっとうな医療体制は供給しませんよ、というメッセージだと思う。こういう人たちに国を任せていては国民の命は守れませんから、二人(菅、小池ゆ)とも至急お辞めになったほうがいい」とテレビでコメントした。全くその通りである。病床や滞在施設を増やしたり、治療薬確保もろくろくしていないのがこの政府だ。唯一政策の拠り所になっているワクチンも、現場では供給が激減して予約を受けることもできない状態が続いている。◆この政府はもはや政府の体をなしていない。国民の命はどうでもよく、ただ自分達の地位の保全のためにやってるフリをしているだけに見える。私たちは自身のため家族のために、もっと冷静に怒りこの無能力な政府を変えていかなければならない。◆このままではニュースで流れていたインドやミャンマーからの映像が浮かんでくる。コロナの爆発的流行下、家族のために不足す

る酸素ボンベを得ようと長蛇の列をなし、命のツナの酸素ボンベを奪い合う人々の姿……。こんな状況がわが国で展開されるかもしれないと想像するのは、果たして杞憂だろうか。政府の無能力さを考えれば、それほど楽観的にはなれないのだ。



芥川だより一七五号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 80	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 89	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 39	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 45	下村嘉明	6
新型コロナウイルス愚考 (16)	明石幸次郎	7
オクラの山たより 59	因了生	7
隠された歴史 34	満田正賢	10
道をゆく 28	成瀬和之	13
マルクスから学ぶ (6)	成瀬和之	14
俳句	土田裕	15
	影山武司	15
編集後記	S K 生	15
ふみの道草 38	山椒魚	16

素老人☆よもだ帳 (89)

坂本一光

◆新しい世紀の神話まだ見えず

二十一世紀も早や二十年が過ぎた。米  
国世界貿易センターのツインビルを崩落  
させた「同時多発テロ」に始まり、  
COVID-19 (CORONAVIRUS disease 2019) の  
パンデミック下で強行されている東京五  
輪の今日まで、世界は混沌とするばかりで  
新しい世紀を象徴するような神話はまだ  
生まれそうにない。

「世界は変える必要があるし、変えるこ  
とが出来る」、目を凝らせばそれが誰の目  
にも見えるようになっていくのに。そして  
また、政治も経済も社会もその全体が大き  
な変革の岐路に立っていると、日々の暮ら  
しのなかで誰もが実感し始めているのに、  
である。川柳も五七五に悲鳴を上げる。

戦せぬ国が神話になりかねぬ

安全の神話が水に流される

ふるさとの神など捨てよ再稼働

安心と言われるほどに増す不安

金メダルと感染数が並ぶグロ

禍つ火のように聖火が燃えた夏

お月さまこれが私の国ですか

二十世紀が終わり新しい世紀が始まっ

たとき、素老人は何を思っていたか。訳の  
分からぬこんなあいさつ状が出て来た。

\*\*\*\*\*

ナジム・ヒクメット(注1)という詩人  
がトルコにいました。二十世紀の初めに生  
まれ、二十世紀の成熟を知ることなしに逝  
つた人です(一九六三年)。その頃、二十  
世紀の成熟を予感した日本の詩人は、「成  
熟と死はたぶん同義であるだろう」とうた  
いました(注2)。前世紀の成熟を見た私  
たちは、二年目を迎えた新しい世紀に何を  
するのでしようか。それはわかりませんが、  
トルコの詩人の『自伝』に添えて、二十世  
紀へのわたしの総括を送ります。

未曾有の進歩というべきこの世紀に

ちちははの小さき生を重ねみる夏

いのち幾千万燃え尽きて積む灰の

なかにダイヤモンドの輝きを思う日

二〇〇〇年九月にポーランドを旅して、

アウシュビッツの灰のなかに、子どもの頃  
に見た漆黒の闇に光る満天の星を思いま  
した。

わがことば忘れずにいる半島に

ことばを知らずわれはいまいる

同じく十から十一月、韓国の大学に滞在し

て、彼とわれとの過去といまとを、そして

未来を思いました。

正気の沙汰でない時代を呪いつつ、人生

が二度あれば一度は満ち足りるのかと自  
問しています。

\*\*\*\*\*

二十一世紀もやがて四半世紀が終わる。  
何が変わり、何が変わらないか。その途  
中までは見届けなければならぬ、と素  
老人は考えている。

(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人

(注1) ナジム・ヒクメットは、ナーズ  
ム・ヒクメットと表記されることもある。

自伝(抄)

ナジム・ヒクメット

草にくわしい人もいる

魚にくわしい人もいる

私がかわしいのは別離

星の名をおぼえている人もいるけれど

私がおぼえているのは別離の名まえ

恋人に愚かしい嫉妬を

感じたことはあつたが

だれにもせん望の気持を

抱いたことはなかつた

チャップリンにさえなかつた

女をだましたことはあつたが

友をだましたことはなかつた

酒は飲んでも

飲んだくれにはならなかつた

自分のパンはかならず

自分の手でかせいできた  
嘘はついた てれくさかったからだ  
嘘はついた 他人を怒らせたために  
ときどき わけもなく嘘をついた

要するに同志たちよ

今日私が別離に犬のように喘いでいる  
としても

人間らしく私は生きてきたし  
これからも生きるつもりだ  
そしてこれから何に  
何を経験するかは  
だれが知ろうか

ナジム・ヒクメットはまた、ヒロシマ  
の少女をうたった歌でも知られる。

死んだ女の子

ナジム・ヒクメット 作詞

飯塚 広 訳詞

木下航二 作曲

とびらをたたくのはあたし  
あなたの胸にひびくでしょう  
小さな声が聞こえるでしょう  
あたしの姿は見えないの

十年前の夏の朝

あたしはヒロシマで死んだ  
そのまま六つの女の子  
いつまでたっても六つなの  
あたしの髪に火がついて  
目と手がやけてしまったの

あたしは冷たい灰になり  
風で遠くへとびちった

あたしは何にもいらぬの  
誰にも抱いてもらえないの  
紙切れのようにもえたい子は  
おいしいお菓子も食べられない

とびらをたたくのはあたし  
みんなが笑って暮せるよう  
おいしいお菓子をたべられるよう  
署名をどうぞして下さい

(注2)武田文章(たけだ ぶんしょう、  
一九三三・一九九八年)は、武田麟太郎

を父に、高見順を師にもち、五十八の詩  
篇を残した(武田文章詩集、思潮社、二  
〇〇〇年)。

反革命 あるいは八月十五日

武田文章

犬にはパンをくれてやれ  
詩人には言葉を  
ゆがんだ感受性の鏡の中に  
おのれの影をしかみいだせない  
奴らには  
死んだ英雄の勳章を

心がつねにしなやかとはかぎらない  
パンも言葉もすえるときがくる  
水差しから水はこぼれ  
年老いた女たちのように  
花は卓上に枯れてゆく

かくじつに夏はめぐりきて

冬は忍びより一年は終る

そうして人は経験をかさねてゆく  
日ごと夜ごと

魂に兆す腐敗をおそれながら

成熟と死はたぶん同義であるだろう

果実が熟して墜ちるように

人もまたかおりを発して墜ちてゆく  
逃れることのできぬ地平の上で

われわれの日常もわれわれの革命も

### 哲学爺いの時事放談(39)

祖蔵 哲

#### 「安心安全」の哲学

過去からの様々な問題と混乱、分断を  
経て、史上初の一年延期となった東京五  
輪が七月二三日に開幕した。新型コロナ  
ウイルス緊急事態宣言下、八月五日には、  
東京都内での感染者が5、000人を超  
え、感染増加が止まるめどは現状で立っ  
ていないが、その中でも各地で競技は進  
行している。八月八日の76回「広島原  
爆の日」でも、TVは何事もないかのよ  
うにオリンピック中継を垂れ流している。  
オリンピックTV放送は事実上電波を独

占している状態なので、否応なし目に入  
り、新聞紙上でも連日にわたってメダル  
獲得したゲームだけが報じられると、日  
本国民の五輪に対する反応が少しずつ変  
化している。現実には、改めてスポ  
ーツ祭典の圧倒的な力を感じる。古代ギ  
リシャ、ローマ帝国以来の歴史上、政治  
がこれを利用してきた理由を実感する。  
1940年第12回オリンピックは東京  
で開催が決定されていた。それを日本は  
日中戦争に国力を集中するという理由で  
返上している。今回の大会は「新型コロナ  
ナへの戦い」より五輪に国力を集中すべ  
きという政治判断である。国民の犠牲の  
上に。

それにしても2021年東京オリンピ  
ックは最初から「ポスト・トゥルース」  
(脱・真実)であった。この現象は世論  
形成において、客観的な事実より、虚偽  
であっても個人の感情に訴えるものの方  
が強い影響力を持つ状況であり、事実を  
軽視する政治、社会状況である。まず、  
招致段階での約束「開催時期の気候は最  
高」「最もコンパクトな大会」「震災復興  
の証」等はすべて「嘘」であった。そし  
て、開催直前の数々の差別発言や人権問  
題での事実の隠蔽と対策の遅れ。そして  
今新型コロナウイルスに見舞われ  
ているメカロポリス東京で「安心・安全」  
にオリンピックが行われているという  
「最大の嘘」が進行中である。

(1) 「安心安全」その近代概念の哲学

さて、その「安心安全」とは何かを哲学的に考えてみよう。「安心」とは主観的な認識、つまり個人の心、感情に近いものだ。それに対して「安全」は客観的状态、誰が見てもそうだと同意できる状態である。これは近代哲学の創始デカルト以来の「主観客観的二元論」である。

近代哲学の祖デカルトはまず「方法論的懐疑」、すなわち「すべてのものが疑わしい」ということから出発し、そういつても「私が疑っている」という「主観の事実」だけは否定できないという結論に達して、私の「絶対確実な確信」から物事を認識すれば「主観と客観の一致」すなわち「真実」が導きだされるとした。

これは私という「主観」が対象物を認識しているという対象の関係構図において「客観」という第三の視点「精神」から両方という目で眺めその一致を保証している。つまり「主観客観」一致の世界である。その時、この客観の視点は私から「主観」が抜け出した「精神」の目となり残された「私身体」と対象物の「世界」は「物の世界」となる。この二元論は「物心二元論」になり物と心は区別される。物から心が分離されることにより、科学が発達した。人間の身体は物として対象化、分析されることにより医学が発達し、その一部臓器さえ物として交換されることを可能にする臓器移植も

行われている。これは人間、生物を機械

とみなす「機械論」的世界の始まりであった。しかし、「機械」とは人間が作ったものであり、「生物」は自然が作ったものである。当然のことながら、人間より自然のほうが先に存在しているのであるから、「生物が機械的」であるというのは「自然は人間が作ったものだ」言っていることになり自然史事実と矛盾することになる。そこで持ち出されるのが「神」である。宗教信仰上の神ではなく超越的存在の「神」である。人間は神ではないが、人間は神から想像された特別の存在であるという考えである。ここに「人間中心主義」の思想が生まれる。

「安心安全」とはつまり近代的人間が自分自身で作りに出した「危険」に対して「安心」を与えなければ不安になるという、きわめて「近代的概念」である。

(2) 近代科学は「安全」を「危険」にする。  
しかし、「安心安全」の対概念は常に「安心」||「安全」ということではない。むしろ「安心かつ安全」なものはない。実際は「安心だけれど安全ではない」「安全だけれど安心でない」もののほうが多い。そもそも「絶対安全」なものはない。というのは「安全」というのは人間が作るものだからである。だから「安心安全」という言葉は「安心」が先にくる。まず、安心しなさいということである。

新型コロナの「ワクチン」も「安心安全」の概念が当てはまる。「ワクチンの安全性」は100%ではない。そしてそれは「未知の副作用」という「リスク」を伴う。それでも「安心」は確保できる。すなわち、「危険」の発生確率、程度の問題である。

そもそも、「安全」という概念は至極近代のものである。それは、人間が自然を利用する際に被る「危険」の反対概念である。例えば、近代的移動手段である「自動車」は道路という空間を走行する場合、衝突は避けられない。自然状態での歩行では起こりえない「危険」を作り出す。この「安全」を保つために我々は「ルール」を作り、自分自身の行動を制限して「安心」を得る。これが近代法である。一方、「飛行機」は自然法則を利用して飛行するが、その制御を誤ると、同じく「落下法則」という同じ自然法則によって「危険」を生じる。これらの「危険」をなくすることはできない。しかし、限りなく低減できるという「安心感」という一種の信仰で近代科学は発展を遂げてきた。

(3) 近代的危険「リスク」  
以上のような近代の「自ら招く危険」は「リスク」と呼ばれるようになった。それゆえ「リスク」は近代的概念である。自然はそのままであればむき出しの危険は少ないし避けることが可能であ

る。しかし、その自然にあえて接近すれば「危険」は現れる。自然の山は遠くから眺めていけば「安全」であるが、登山などでそれに接近「利用」すれば「危険」を伴う。すなわち人間が自然を利用するようになると「安全」から「危険」が出現してくる。これが「リスク」である。

「リスク」による「不安」を抑え込むためには、自己規制「ルール」や「習慣化」「いつもと同じ」「ルーティン」などが必要である。すなわち「安全」とは「ルール」や「科学の信頼」のような目に見えない「不確実性」に基づく「安心」で構成されているのである。

(4) 存在論的不安  
自ら作り出した「安心安全」に常に脅かされている社会的状態が「存在論的不安」であり、これを不確実なルールで抑え込もうとしているのが近代社会の構造化理論であると英国の社会学者V・ギデンズは言う。一方、哲学者ハイデガーは人間存在の根本を「死に向かう存在」と定義しそれを「存在論的不安」の概念としている。人間は常にこの不安とともにあるのだが「頹落」した人間はそれを覆い隠してしまふ。そして彼は近代をこの「不安」を隠蔽する時代と捉える。ギデンズも同じように近代の「自然を利用」することで発展する科学技術は、先にみたように基本的に「不安」としてとらえるが、近代社会はむしろ「存在論的安心」を求

める構造と捉えている。

### (5) 現代は「再帰性社会」

近代以前の社会規範(ルール)は常に外部にあった。古代には、何事も自然の摂理が決定する「自然の掟」であったし、前近代社会では「共同体」や「宗教」であった。しかし、近代になり人間は「個人」という自己に自覚め、先に述べた「デカルト的二元論の思考により、我々自身の精神が世界のルールとなり、自分自身のことは自分自身で決めなければならぬ」という課題に直面するようになった。それは一方では「不安」の原因にもなる。「自己決定」は誤れば「自己責任」を負うことになるからである。そして近代システムは目に見え実感できていた物や人同士の「関係」を「抽象システム」に置き換えて「不安」を作り出していった。その一つが「貨幣システム」であり、物の交換が「時間と空間」を超えて「数字」という「情報交換システム」に置き換わっていった。一方「専門化された知識」も日常の普通の生活を通じて私たちが接触しなければならぬ状態「専門家システム」を作り出した。近代技術世界はその基本的理解と専門家関との関係なしに日常生活を送れないという状況になっている。産業革命以来のエネルギー革命や交通移動など自家用車、家電からスマートフォンまで、近代技術システムに依存しない環境での生活は不可能になってい

る。

これらの「抽象システム」は我々をして近代以前の素朴な「個々ローカル」な立場から否応なし一度引き離されて再度時空間の世界の中で「再構築」されることになる。これをギデンスは「脱・埋め込み」という。個々人が個別に埋め込まれて存在していた親密な世界から一旦引き離されるということを意味する。そしてさらに高度な近代化システムは「制度的再帰性」を加速するという。「再帰性」とは社会や自己の在り方を何らかの基準に照らして自分自身を変化させるということである。この「基準」が前近代では「伝統」や「習慣」であったが、近代ではそれが実際の営み自身がそのものに変化を与え、再編成されるとい構図となっている。それが先の「抽象システム」で行われているのである。

### (6) 「再帰性」その自己言及パラドクス

古来より哲学者、論理学者などの強い関心をひいてきた最も有名なパラドクスは、クレタ人エピメニデス (BC6) が「クレタ人は嘘つきだ」といったという「クレタ人のパラドクス」であろう。エピメニデス自身もクレタ人であるため彼の言明も虚偽であると考えると、「クレタ人は嘘つきではない」という結論が導かれてしまう。しかしこれはエピメニデスが嘘をついているという仮定と矛盾する。一方エピメニデスが嘘をついていな

いと仮定すると、この言明は真実となり、エピメニデスがクレタ人であるという事実と矛盾する。そのためこの言明の真偽は確定できない。これが「自己言及のパラドクス」である。発話主体、あるいは記号が、自己自身を指示対象としてもつこと。「自己指示」「自己参照」とも呼ばれる。パラドクスとはその発言の真偽について、どちらも成り立つという自己矛盾的な状況である。

この状況から「再帰性社会」は自己が作り出した社会から自己が影響を受けそれが繰り返される「自己言及的社会」とも言える。それ故にこの社会は真偽とも決定しない不安定、つまり「不安」を常に抱えている。

### (7) 近代の矛盾「オリンピック」と「Covid19」

近代オリンピックは以前の号でも参照したように1896年にクーベルタン男爵が戦乱のヨーロッパ世界を中心に平和を作り出すために考案したアマチュアスポーツの「安全」な聖域としての祭典であった。その作られた「安全」が「安心」に導くはずであったが、その「安全装置」自体に自己言及的矛盾が出てくる。アマチュアリズムの崩壊や商業、政治利用の問題である。それは以前にも説明したが「近代スポーツ」の抱えている自己矛盾でもあった。

「Covid19」も同じように近代が生ん

だ自己矛盾である。これも以前に説明したが、そもそも自然界には人間より以前にウイルスの方が先に存在していた。ウイルス自体は自然と同じで悪でも善でもない中立の存在である。「危険」は元々あったが、近代になって人間が自然を利用するようになってからウイルスはその「リスク」として人間に現れただけである。「安全」は我々人間が近代になって生み出した概念であり、それが形となって表れたのが人間に「リスク」となって「危険」を与えるウイルスである。そして「安心」は人間自身が作りだした「悪」を弱める概念である。

私たちは使い慣れた言葉にこそ、その概念に自己矛盾を含んでいるということに自覚しなければならぬ。そしてその概念は現実実態が現れているのである。この概念理解のために超越的言語である哲学は必要である。人間がもたらす行為である、科学、政治、文化、芸術、スポーツ等々すべてはこの概念の実現化されたものである。



下村 嘉明

「後悔先に立たず」というが、やってしまった事を後でいくらくやんでもどうにもならない。四月末、五月の連休前に奥駈をやるかと友人と出かけた時のことだ。最終の近鉄電車で吉野口駅に着き休むこともせずに登り始めた。雨の中重いザックを担ぎ歩き続けると想像以上に疲れてテントを張って寝る羽目になった。

翌日、遅れを取り戻す為にほとんど寝れていない身体に鞭打って焦って登ったら山頂近くで吹雪にあってしまったのだ。それで余裕をなくして目先に見えた階段にとりついてしまった。階段を登り始めると雪と氷に階段が覆われ始めた。しま

ったと思つたが引き返しもしせずに登り続けた。何とか登り切つたが、その疲れが翌日に大きく残つてしまい、結果的に途中敗退になったのである。確かに、大峯山奥駈を少し舐めていた感はある。その反省から、もう一度身体を鍛えなおし真剣に向き合おうと思うようになった。

話がそれだが、12名の参加者と案内人は登ってきた道を下る。山は登りよりも下りが疲れる場合が多い。疲れてる足腰で山を下るときは注意が要る。私と幾人かは足早に下って女人結界の門で待ったがなかなか後続が来ない。かなり待った後、伝令の人が下ってきて「ひとり足がつつてしまい早く歩けないから、先に

宿に行つて休んでくれ」と。みんなは迎えに来ていた宿の車、私は自家用車で宿に向かった。

洞川でも最も古いと思われる宿屋は、洞川温泉の中ほどにあった。初めて来た洞川は山に囲まれた風情を感じさせてくれる旅館街だ。今は、コロナで客も少なく私たちが泊つた宿も私たちだけだった。貸し切り状態だ。いつもなら多くの講が来ていたはずだ。ビールを飲みながら休んでいると後続の人たちも帰ってきて一服し風呂に入り夕食になった。

待ちに待つた宴会だ。飲み放題、しゃべり放題の無礼講だ。私は、いつも通りの悪態で飲みまくり、しゃべりまくって独り悦に浸り酔っ払って這つて二階の部屋に行き寝た。10畳ほどの部屋に二人であつた。案の状、翌日は地獄の二日酔いを味わうことになった。

朝、6時に朝食を食べ、近くにある龍泉寺にお参りする。龍泉寺は役行者が冬場修行した歴史のある寺で本堂や庭も広く観光名所である。その龍泉寺の本堂にお参りし、私たち12名が護摩壇の近くに座ると、歌舞伎役者を想像させる住職が護摩供養を始める。そばにはホラ貝を持つた若い僧。厳粛な雰囲気の中儀式が始まった。護摩木を組み火をつけて蔵王権現の力で参加者の欲望を焼き尽くす。荘厳なお経を唱えながら住職は護摩木をくべる。ホラ貝の大きな調べが響き渡る。初めて身近で見る護摩供養に荘厳な強い

オーラを感じた。

山岳修験道はシンプルであるが難しい。欲を捨てよ、懺悔せよ、一見すると簡単ないように見えるが難しい。難しいゆえに蔵王権現の力をもらつて何とか無欲の自分を取り戻し、自然との一体化を成し遂げたいという行に思える。日本独特のものに違いない。

龍泉寺の庭には山からの伏流水が豊富に流れていた。大きな神木や幾つもの池の風景から1300年前に役行者が修行した様子を想像した。何も無い山奥の地で前鬼と後鬼の鬼を従えて修行する様である。世間から遠く離れた洞川の生活とはどんなものだったのだろうか。後鬼の子孫が洞川にいるとも聞いた。前鬼の子孫は奥駈の中間地点である前鬼川の上流に宿坊・小仲坊を営んで修験者を支援されている。当主は61代目の五鬼さんである。私も2回ほど小仲坊を通り過ぎたが古い歴史を感じさせる宿坊であつた。

なにぶん交通の便が悪く生活するのが大変なところであるが、営々と1300年間も維持されていることに神がかり的なものを感じる。

龍泉寺で護摩供養を終えて、吉野の金峯山寺へ向かう。金峯山寺は有名な寺で大きな蔵王権現が祀られている。もともとは山上ヶ岳にある蔵王権現が遠くて人々がお参りしにくい為に吉野に造つたという。山上ヶ岳の大峰山寺と金峯山寺は同じ寺だと言つてもいいと思う。金峯

山寺にお参りするのも初めてであつたが、寺の柱や敷板の大きさに度肝を抜かれた。幾度も火災にあつただろうが、それでもこれだけの巨大な寺を手作業で作るのは気の遠くなるようなことであつたと容易に想像できる。

本堂の正面に非常に大きな提灯が下がっている。岩組と書かれていた。何でも丹波篠山の奥駈講が寄進されたとか、よほど大きな講だつたと思える。多くの人々によつて維持されてきたのだ。コロナ禍でも人も少なくゆつくりと寺の敷板に腰を下ろして山上ヶ岳の方向を見ていると二日酔いの身体が少し洗われていくように感じた。私も吉野から山上ヶ岳まで歩いた思い出がよみがえってきた。

大峯山千日回峰行は金峯山寺から山上ヶ岳を1000回往復する。私は登るだけでバテタのだが、回峰行者はその日に下り次の日も登る。信じられない行である。もし、若い時に私が同じようにやろうとしても、多分一週間ぐらいで倒れてしまつただろう。一日だつたら出来るが、毎日続けるとなれば絶対に無理だ。途中で倒れて死ぬに違いない。

大峯山には、多くの人を引き付ける何かが山にたなびく雲海の如く漂っているのだ。日本には多くの霊峰と呼ばれる山々があるが、その中でも大峰山は特別の存在だと言える。まさに、今も生きてる日本の聖地なのだ。

## 新型コロナウイルス禍愚考(その16)

明石 幸次郎

菅首相が「オリンピックの開催を取り止めるより、行う方が難しい」と迷言?を発し、さも熟考を重ねて決断したように演出して、東京オリンピックは、予定通り開幕されました。

先日、開会式をテレビで見ましたが、IOCのバッハ会長と、組織委員会橋本会長の長くて昂揚したダラダラの挨拶と、それと対照的な天皇陛下の慎み深い内容の簡潔な挨拶が印象に残りました。

首相は開催に当たっては、国民の生命と健康を守ることが前提だと国会で答弁し、命を最優先にするためと称して無観客で行うことになったと言うものの、皮肉にも開催と共にコロナ感染者は東京では4千人を超え、全国で1万2千人と過去最多の数字になって、尾身会長は、驚く速度で第5波の感染が拡大して、今は危機的な状況だと言っています。

大阪では、4度目となる緊急事態宣言が8月2日から31日まで発令されることとなり、その間は飲食店でのアルコール類の提供は禁止されますが、過去3度の規制内容と余り変わらず、「自粛疲れ」と宣言慣れ?で首相や知事をお願いベースで、行動制限を加えて人の行動を抑えようとしても、ロックダウンでもしない限り、特に若い世代は抑えるのは難し

いと思います。

現在、東京では、感染者の約71%が30代以下と言われています。

菅首相はワクチン接種で高齢者の感染率、重症化率は下がっているので、ワクチン接種が感染防止の決め手であるとして、ワクチン接種を推進していると緊急事態宣言の度に繰り返し言っていますが、それであれば、今回の宣言からは、満遍なく全国一律に高齢者から接種する従来のやり方を変えて、限られた供給量のワクチン接種を感染拡大の勢いが広まっている関東(1都、3県) 関西圏(2府、1県)、北海道、愛知、福岡、沖縄で全国の感染者数の85%以上を占めている、この地域の30代以下の若者を重点的に接種したらどうかと思ってしまう。

まず、火が燃え盛っているところから、火を消さないとこの夏休みにお盆もあり都市から田舎に移動する若者からまたもや地方に感染が拡大する恐れがあるのではないでしょうか。

一度、接種のやり方を決めるとそれを忠実に守って実行する従来のやり方では、感染力が強いとされるデルタ株の感染拡大を防ぎきけることは、難しいと誰でも分かります。

ワクチン接種が終えていない若者に感染リスクの高い行動を控えて、「家でオリンピックを見て日本選手を応援して」と訴えてみても、それは若者に響かず、難しいのではないのでしょうか。

菅首相は、政府は今秋行われる予定の衆議院議員選挙を想定してか、11月末までに希望するすべての人が2回接種するワクチンを確保出来ると言っています。米英頼りのワクチン供給をお願いするだけで、首相の掲げる「国民のための政治」が出来て、コロナに打ち勝ち、オリンピックも成功したことで、自分の総裁選と衆議院選に勝てるというシナリオ通りに進むのか、それは、新型コロナウイルスが決めることになるかも知れません。

## オクラの山たより(59)

困了生

先回は祇園の妓女小糸と蕪村のことに ついて述べてきました。妓女とは「広辞苑」によれば「芸妓と遊女」のことをさします。妓女という中途半端な言い方をしたのは当時の妓女が芸妓と遊女のいずれであるか、その境目がはっきりとしなためです。「遊女」は「身を売る」のをなりわいとする女性であり、芸妓は「芸を売る」ことをなりわいとする女性ということにはなっています。

しかし、蕪村の時代では、芸妓はまだ世にあらわれたばかりでした。芸妓(東京では江戸時代から変わらず芸者という

が、京阪では芸妓といい、けっして芸者とはいわない)は宝暦年間(1771~1764)に京都の遊所に初めて登場し、江戸ではそれから少し遅れて吉原に現れました。芸妓は遊女の一部が変形したものと考えられ、島原遊郭のガイドブックであった斜天・呑獅の「二目千軒」(宝暦七(1757)年刊 版元は八文字屋八左衛門)には

太夫、天神自ら三味線弾かざる故、三絃ひかさんとおもへば、この太鼓太夫を呼ぶなり。また芸妓といふものほかにあり。昔はなかりしに宝暦末年にはじまる。

とあり、三味線を披露するものと芸妓が別物であると書かれています。太鼓太夫・芸妓いずれもが遊女に代わって席を取り持つ女性のことであるとされています。

島原の遊女のランキングでは最上位が「太夫」、その次が「天神」。そして「囲」、「端女郎」と続きます。太夫ともなると、客の前では常に無表情であり続け、暑い日でも汗をかかず、寒い夜でも火鉢で暖まる仕草もせず、人間的な美しさや雰囲気はまったく感じられない仏のような神秘さが求められました。客の前で太鼓を叩いて三味線を弾き踊りを舞って客に媚びを売るなどということはもってほかでったのです。

小糸と蕪村の交遊は芸妓が世に現れてまだ二十年ほどのこと。美人であった小糸は祇園の芸妓であったというよりも売れっ子の「遊女」であった可能性が強いと考えられます。

さて、この「遊女」という語を用いた句は松尾芭蕉では「芭蕉俳句集」(校注 中村俊定 岩波文庫 1970 年刊) によれば「おくの細道」にある

一家(ひとつや)に遊女も寝たり萩と月の一句だけであり、「遊女」という語を用いることは芭蕉にあつてはきわめて稀であつたといつてよいでしょう。

しかし、蕪村にはわずかですがあります。すぐに思い浮かぶのは次の三句です。

① 若竹や 橋本の遊女 ありやなし

一七七五(安永四) 年五月

② 梅咲いて帯買ふ室(むろ)の遊女かな

一七七六(安永五) 年

③ ほととぎす 歌よむ遊女 聞こゆるなる  
「新花つみ」 一七七七(安永六) 年の作か

この中で特によく話題にされるのが①の句です。句の中にある橋本は私の住む宇治の近く。以前から気になっていた句でもあります。

にある大坂街道の宿駅で奈良・平安の昔には、ここに対岸の山崎に架した山崎の橋があり、その東詰にあたることから、この名が出ました。山崎の橋のことは「土佐日記」に、また橋本の名は「栄花物語」や藤原頼通が高野山に参詣した折の記録「宇治関白高野山御参詣記」に見えます。山崎の橋は九世紀には何度も流された末に修復されることもなくなりましたが、戦国末期、豊臣秀吉が朝鮮出兵のために一度架け直されましたが、これも十七世紀はじめには廃絶し、それ以降は同じ橋本の地で「狐川の渡し」と呼ばれる渡し船が対岸の山崎との間を結んでいました。そのため橋本の宿場は多くの旅人でにぎわっていたと伝えられています。

このように古くから淀川沿いであつてよく知られた地であつたので、古来、この地に淀川の河口近くの遊里として有名な江口と並ぶような遊郭であるとされてきました。しかし、尾形怱氏によれば、それを裏付ける史料は皆無に近く、わずかに中世の仏教説話集「撰集抄」巻五で西行と江口の尼との連歌酬和のことを述べたくだりに次の記述があるだけだといえます。

治承二年(一一七八年)長月(陰曆九月)

の頃、(中略)江口・橋本などいふ遊女の住み家を見めぐれば

治承二年といえはまだ平清盛が生きていた頃。淀川河口にある江口・神崎は平安時代から「天下第一の楽地」といわれ京の人々にも知られた遊女の名所でした。そして、すでに江口の遊里が廃絶した後生まれ世阿弥の謡曲「江口」によつて江口の遊女に叙情的な美しさをもった女性という文学的なイメージを与えられました。

それに対して橋本はどうであつたでしょうか。一六八八(貞享五)年刊の「諸国色里案内」には

橋本の旅籠屋、大坂街道の宿にて、旅人をとむる。その昔はなかりしが、寛文元年(一六六一)の頃よりはじめて事おこり、今よほど良き女ども老軒に二人三人ずつもありて、(中略)昼の仮契(けち)下級の遊女のこと、は、二匁ばかり……

とあります。「二匁ばかり」とは遊興の値段で現在の三千円ほどでしょうか。この記述からは橋本が遊里というよりも宿駅の旅籠にわずかの飯盛り女をかかえていたという情景が見えます。

また、江戸後期に書かれた喜田川守貞の「守貞謾稿」に載せている「天保以前諸国遊所見立角力(すも)番付(天保期以前の全国の遊里のランキング表)」でも東西各九十一カ所の遊所のうち、橋本

の名は西の五十六枚目にやっと見ることができます。

つまり、蕪村が生きていた時期の橋本はとて江口と並ぶ遊里ではありえず、「橋本の遊女」の名をもつて麗々しく呼ばれるような実体はなかつたということです。

### 三

「橋本の遊女」の実体はない、とすれば「若竹や橋本の遊女ありやなし」はどう捉えたらいいのでしょうか。

この句の一般的な理解は、淀川下りの三十石舟から、若竹が生い茂る橋本の遊郭を望み、昔なじみの遊女が今も無事であるかどうかを思いやつた、ということであり、昔なじみの遊女を気づかう作者の思いがまつた句だ、となります。

冒頭の「若竹や」ですが、確かに橋本のあたりは竹林の多いところですが、これは実景かもしれません。しかし、「橋本の遊女」は先ほど述べたように「撰集抄」や謡曲「江口」から追想された幻想の中の遊女であり、昔なじみの遊女ではありません。そして「ありやなし」はどうか。「ありやなし」は「伊勢物語」の名にしおはば いざこと問はん 都鳥

わが思ふ人は ありやなしやと

を踏まえた現前せぬ女性への思慕を表現した幻夢的な表現ですが、蕪村の句にあ



るのは「ありやなし」つまり「あるだろ  
うか、いや、ない」という表現です。こ  
のことにこだわれば「新古今和歌集」に  
ある坂上是則の次の歌が連想されます。

園原や伏屋に生ふる帯木（ははきぎ）の  
ありとは見えて 逢はぬ君かな

園原は古代の東山通で美濃国と信濃国の  
国境にあつた東国に入つて最初の山里。  
今の恵那山トンネルの長野側入り口の所  
にあります。伏屋（布施屋 ふせや）は  
難儀な旅をする旅人を救済するための質  
素な仮の宿。帯木は園原にあつて遠く  
から見るとあるように見え、近寄る  
とその姿が見えないという伝説の木  
です。この有名な歌を下敷きにした  
とすれば「ありやなし」は「ありと  
は見えて逢はぬ君」への慕情を寄せた  
ものだといえそうです。

この考えを補強する蕪村の俳画に「若  
竹図」があります。この俳画には縦長の  
画面の上半分に「若竹や……」の句が蕪  
村の自画賛のように書かれており、下半  
分には数竿の若竹の中にひっそりとたた  
ずむ蘆屋のみが描かれています。しかも  
蘆屋の中の様子ははっきりとは見えず、  
図の中には遊女の姿はどこにもありませ  
ん。

この俳画に描かれた世界が、蕪村自身  
がイメージする「若竹や」のの世界だ  
とすると昔なじんだ実在の遊女を懐かし

むというよりは幻影の彼方の遊女のイメ  
ージを若竹の茂る竹林の向こうに求め  
た、ということになります。まさしく「あ  
りとは見えて逢はぬ君」への思慕です。

#### 四

「若竹や」の句で面白いのは「遊女」  
に対して「上から目線」といった見方が  
感じられないことです。この点、②と③  
の句にも同様なことがいえます。

② 梅咲いて帯買ふ室（むろ）の遊女かな  
梅が咲いて活気づいた瀬戸内の港町室の  
津。姫路辺りから来た商人を取り巻いて  
嬌声をあげながら室君（むろぎみ 室津の  
遊女たち）が新しい帯の品定めを夢中でし  
ている。華やいだ春の雰囲気と躍動する  
群像描写が素晴らしい句です。遊女たち  
の騒ぎぶりを温かい目でみている作者の  
心情も感じられます。

次の③の句は蕪村が母親の五十回忌に  
むけて作ったとされる句です。

③ ほととぎす 歌よむ遊女 聞こゆる  
「新花つみ」 一七七七（安永六）年の作か

この句の前には「ころもがへ母なん藤原  
氏なりけり」という句があります。母親  
の出自を誇った句といえますが、この句  
に続くのが③の句です。

生まれは高貴でも今は落ちぶれ遊女。

しかし生まれの良さは争われぬもので近  
ごろその遊女の詠んだ「ほととぎす」の  
歌が世間で評判になっている、というの  
が③の句の句意です。「歌よむ遊女」で  
すから高級な遊女であり、母につながる

イメージもあります。以前、書いたよう

に蕪村の母親は丹後出身の稼ぎ奉公の女  
性であつたということ以外は確たること  
は不明です。母親が貴種の出自であつた  
ことが真実か蕪村の幻想であるかはまっ  
たく分かりませんが「遊女」という言葉  
には母親への思慕がまわりついている  
ようです。そのため蕪村の句の中で遊女  
は人間として思慕の対象として美の対象  
として、また感情交流のなし得る相手と  
して描かれています。一条戻り橋の妓楼  
の遊女であつた遊女綱との交遊で生まれ  
た次の句はこうした蕪村の姿勢から生ま  
れたものなのでしょう。

④ 羽織着て 綱も聞く夜や 川千鳥

⑤ 春雨や 綱が袂に 小提灯

一七六八（明和五）年  
一七六九（明和六）年二月十日

特に④の句の「羽織着て」には綱に対す  
る蕪村の優しさがこもっていて、しかも  
綱の姿がくつきりと映し出されていま  
す。蕪村の人間性がよく出ている佳句で  
す。一条戻り橋の遊女綱のもとには友人  
であつた太祇とともによく通っていたら  
しい蕪村でした。④の句にある蕪村、俳

人太祇、そして遊女綱の三人が一夜じつ  
と川千鳥の声に耳を傾けている風景は詩  
情あふれる一枚の絵にもなりそうです。

#### 五

こうした作者の人間性がよく出ている  
蕪村の句に対して松尾芭蕉の遊女の句は  
どうでしょうか。

「一家に遊女も寝たり萩と月」の句は  
「おくの細道」のちようど中ほどに「市  
振」のくだりに出てきます。芭蕉はもと  
もと俳諧連句が得意で「おくの細道」も  
そのスタイルをもとにして全体が構成さ  
れているといわれています。連句の作法  
では次々と続いていく句の中に彩りを加  
えるため必ず中ほどの句に女性の姿を入  
れるのが常識だそうですから「こころら辺  
りに女性の話を入れなければ」というこ  
とで遊女の話を入れたらしい、というの  
が現在の一般的な説となっています。

新潟から富山へ行くこうと北陸道随一の  
難所といわれる親不知子不知（おやしら  
ずこしらさ）を越えてようやくたどり着  
いた市振の宿で芭蕉は新潟から伊勢に詣  
でるといふ隣室の遊女から「ぜびとも旅  
の道連れに」と頼み込まれます。しかし、  
不憫とは思いつつも芭蕉は断り「一家に  
……」の句を詠んでいます。この「市振」  
のくだりの最後の部分だけを示してみま  
す。

不憫のことにははべれども「我々

は所々にてとどまる方おほし。ただ人の行くにまかせて行くべし。神明の加護かならずつつがなかるべし。といひ捨てて出でつつ、哀れさしばらくやまざりけらし。

一家に遊女も寝たり萩と月  
曾良に語れば、書きとどめ侍る。

この文の末尾に、市振での出来事を「曾良に語れば書きとどめ侍る」とありますが、曾良の日記には該当する記事はありません。ですから、この市振での遊女の一件はすべて芭蕉の創作であつたかどうかは今も議論になっていきます。

それはともあれ、この市振のくだりについては真実であれ創作であれ芭蕉の遊女に対する感じ方がよく出ている部分です。新鴻の遊郭から一時的に抜け出して伊勢に抜け参りする貧しい遊女に「哀れさしばらく止まざりけらし」と芭蕉は涙を流したかもしれません。しかし、この遊女への視線にはどこか冷たいものを感じさせます。遊女を憐憫の対象としてしか見ていない、そんな感じがするのです。

また、一説にいう「月」は芭蕉で「萩」は遊女という見立てであるということからすると、高みの上から地上に住む最下層の人たちの運命に翻弄される姿を見る、となります。やはり、遊女を憐憫の対象とみてその境遇に介入しよう、または感情移入しようという姿勢は見られません。あくまでも観照の対象でしかない

のです。

蕪村にはないこの冷たさはどこから来るのか。芭蕉の生きた元禄という時代と蕪村の生きた安永・天明の時代の違いなのか。それとも武士という支配階級の出身であり故郷を喪失することのなかった芭蕉と農民出身それも一家離散も経験し故郷を失った蕪村との違いでしょうか。妻子を捨てた深川のわびしい芭蕉庵の中で形成された価値観と華やかな京の街での俳人仲間と交わる中で形成されたそれとの相違でしょうか。

筆者が芭蕉を尊敬はしますが近寄りたいたい、結局は自分にはよく分からない俳人であると感じる一方で蕪村の人間に対する目の温かさに共感する由来です。蕪村の人々への視線の温かさというところでもう一句。

みどり子の 頭巾眉(まぶか) 深き  
いとおしみ

明和年間の作と推定される句

句意を説明する必要はないでしょう。背中に負ぶった赤子にかぶせた頭巾が大きくすぎてダブダブであり、それが眉まで下がっているというのです。額も隠れるくらいにずり下がった頭巾の縁に赤ん坊の可愛らしい瞳が笑っている。そのいとおしいこと。初孫を可愛がっているジジとババならずとも思わず微笑んでしまうでしょう。蛇足ながら、これほど率直に赤

ん坊へのいとおしさをストレートに表現した句も珍しいですが、「みどり子」の様子を「頭巾眉深き」と、その七音のみで描写しつくした表現力も感嘆するしかありません。

六

最後に、芭蕉・蕪村とくれば近世の代表的な俳人小林一茶を出さないわけにはいきません。一茶が遊女を詠んだ句では次のものは有名です。

木がらしや二十四文の遊女小家(こや)  
八番日記

二十四文の遊女とは江戸の本所吉田町に出没した夜鷹のことです。実をいえば五十五歳の一茶は一八一七(文化十四)年の門人への手紙で全身に皮癬(疥癬のこと)という腫れ物ができ、「吉田町、二十四文でもなめたかと思はれんと推察候へば」と記しています。一茶は身に覚えのある若いころの悪さのことを思い出していたに違いありません。

本所の吉田町を働き場とした夜鷹たちは、そのほとんどが瘡毒(梅毒)にかかっています。喜田川守貞の「守貞謄稿」には、吉田町の夜鷹たちが瘡毒のため鼻が取れ、身体も不自由になりながら、敷物をかかえ辻に立って「おいで、おいで」と客を呼び止めている様子が書かれています。この最下層の遊女と云ってよい夜

鷹を相手とするのは、信州の田舎から出てきて江戸の街で貧困な生活を続けていた一茶のような都市下層の、それも独り身の男たちでした。

一茶はしばしばこうした社会の弱者である遊女を詠んでいます。

霜枯れや 鍋の炭掻く 小傾城(こけい)  
せい まだ一人前の遊女になっていない  
少女のこと

句の情景は浅間山麓追分の宿場で下働きをしている女の子(飯盛り女の見習いで、やがて遊女となる少女です)が寒い冬の時季に小川で鍋の炭を掻き落としている様子です。最底辺の弱者に向ける優しい一茶の眼差しがうかがわれます。その優しさは劇的ともいえる一茶の人生からくるともいえますが、その辺のことは藤沢周平の小説「一茶」に書かれていますので、興味のある方は御一読ください。

### 隠された歴史(34)

満田 正賢

前回は、近畿に残る寺院の銘文が、墓誌と同様に後代につくられたものであると話しましたが、考察の対象として、法隆

寺の釈迦如来像光背銘を意図的に外して  
いました。その理由は、法隆寺の釈迦如  
来像光背銘の成立過程の解明が法隆寺自  
体の成立過程の解明と深く関連している  
からです。今回は法隆寺の釈迦如来像光  
背銘と薬師如来像光背銘がどのようにし  
て成立したかということについて考えて  
みたいと思います。

法隆寺の釈迦如来像光背銘の文面は次  
の通りです。

「法興元卅一年、歳次辛巳（六二二）十  
二月、鬼前太后崩ず。明年（六二二）正  
月二十二日、上宮法皇、枕病して念（こ  
ころよ）からず。干食王后、仍りて以て  
劳疾（いたつき）し、並びに床に著（つ）  
く。時に王后・王子等、及び諸臣と与に、  
深く愁毒を懷（いだ）き、共に相發願す。  
仰ぎて三宝に依りて、当に釈像の尺寸王  
身なるを造るべし。此の願力を蒙り、病  
を転じ寿を延し、世間に安住す。若し是  
れ定業にして、以て世に背かば、往きて  
浄土に登り、早く妙果に昇らむことを。  
二月二十一日、癸酉王后、即世す。翌日  
（二十二日）法皇、登遐す。癸未年（六  
二三）、三月中、願の如く、釈迦尊像并  
びに挾侍及び莊嚴の具を敬造し竟（おわ）  
る。斯（こ）の微福（みぶく）に乗（よ）  
り、信道の知識、現在には安隱（あん）の  
ん）にして、生を出でて死に入らば、三  
主に随ひ奉り、三宝を紹隆して。共に彼

岸を遂げ、六道に普遍する法界の含識も  
苦縁を脱することを得て、同じく菩提に  
趣かむ。司馬鞍首止利（しば・くらつく  
りのおびと・とり）仏師をして造らしむ」

参考までに法隆寺薬師像光背銘も再掲し  
ます。

「池辺の大宮に天の下治らす天皇（用明  
天皇）、大身勞き賜う。時に歳次丙午の年  
（用明元年Ⅱ五八六）、大王天皇（推古天  
皇）と太子（彦人皇子か）を召して誓願  
したまう。『我が大病氣、太平ならむと欲  
い座す。故、寺の薬師像を造り作りし、仕  
え奉らむ』と詔す。然るに、時に当たり  
て崩じ賜い、造り堪えざれば、小治田大  
宮に天の下治らす大王天皇（推古天皇）  
及び東宮聖王（聖徳太子）、大命を受け賜  
いで、歳次丁卯（推古十五年Ⅱ六〇七）、  
仕え奉る。」

梅原猛氏は「隠された十字架」で法隆  
寺は非業な死を遂げた聖徳太子一家の怨  
念を封じ込めるために建てられたという  
氏独自の法隆寺論を展開しています。

梅原氏は、薬師如来像光背銘は法隆寺  
の「資財帳」をもとに偽造されたと考え  
ています。資財帳の文面は「金泥銅薬  
師像壹具、右奉為池辺大宮御宇天皇、小  
治田御宇天皇并東宮上宮聖徳法王、丁卯  
年敬造請坐者」です。梅原氏の考察は次

のようなものです。

「私は、この話は一方において『薬師寺  
縁起』にもとづき、一方においては『資  
財帳』の記事にもとづいて作られた話で  
はないかと思う。つまり『資財帳』にあ  
る池辺大宮御宇天皇（用明）、小治田御  
宇天皇（推古）、東宮上宮聖徳法王（聖  
徳太子）の三人を、天武帝と持統帝の話  
にあてはめたわけである。しかし、そう  
することによって『丁卯年』は一巡くり  
上がってしまうばかりか、仏像建造の主  
体も変わってしまったのである。（中略）  
私は『資財帳』はあくまで正確だったと  
思う。やはりこの像は丁卯年（天智六年）  
に作られた像なのであろう」

そして、梅原氏は、この考察が釈迦如  
来光背銘にもあてはまるとします。

「何とか『資財帳』の記事と矛盾しない  
ようにしつつも仏像の製作の時を一巡く  
り上げ太子の伝承とこの仏像とを結びつ  
けようとしたのである。そして薬師寺の  
場合のように、その釈迦像を父から子に  
伝える寺、つまり、太子一家の代々の寺  
としようとしたわけである。（中略）と  
ころが前帝の遺言―後帝の仏像建造とい  
う形を、薬師像Ⅱ丁卯年、釈迦像Ⅱ癸未  
年建造の『資財帳』の記事と矛盾なく結  
合させるために、前者は発願から仏像建  
造まで二十一年の歳月を要し、後者はわ  
ずか一年にして仏像が出来上がったとい  
う不均衡を生ぜしめたわけである」

梅原氏の法隆寺論の中で展開された法

隆寺の薬師如来像と釈迦如来像光背銘に  
関する考察のポイントは二つあります。

第一に、法隆寺が再建されたのは和銅  
年間であり、薬師如来光背銘が作られた  
のも、釈迦如来光背銘が作られたのも、  
再建時の和銅年間である、ということだ  
す。すなわち、薬師如来像、釈迦如来像  
そのものは和銅年間よりも前に造られて  
いたが、それぞれの像が和銅年間に法隆  
寺に移設されて「光背銘」を付け加えら  
れた、ということだ。

第二に、和銅年間は薬師寺が繁栄して  
いた時期であり、再建された法隆寺の僧  
侶は、薬師寺に対抗して、法隆寺に薬師  
寺以上の権威を持たせるために光背銘を  
作文した、ということだ。薬師寺は天  
武天皇が中宮（後の持統天皇）の病氣平  
癒の為に創建し、持統天皇、文武天皇に  
引き継がれたものですが、法隆寺は、薬  
師如来光背銘によって、用明天皇の病氣  
平癒の為に推古天皇と聖徳太子が薬師像  
を作った（実際の仏像製造は丁卯年Ⅱ天  
智六年）、という歴史を偽造し、釈迦如  
来光背銘によって、聖徳太子の王后およ  
び王子をして太子の為に釈迦像を造らせ  
た（実際の仏像製造は癸未年Ⅱ天武十二  
年）、という歴史を偽造した、というこ  
とです。

この梅原氏の論に対して、九州王朝説  
を掲げる古田武彦氏が反論しています。

古田氏は「古代は輝いていたⅢ」の中で、  
「梅原氏の法隆寺論は、氏独自の鋭い直

感と豊富なイメージがあふれ、読む者の心裡を酔わしむるものがある。たとえば、釈迦三尊像について、早くも『橘寺からの移入』を説かれるなど、氏の直感力の先進性をしめすものである。」とする一方で、梅原氏の論の問題点を指摘して「まず。第一に、文献(資財帳)への解釈を基礎にして、金石文(薬師如来や釈迦三尊の光背銘)を疑うという方法論をとっていること。第二に、「王后」が「持統」であり「癸未年」が「天武十一年」であるとなぜ解釈できるか。なぜ日本書紀にその記事がないのか、ということ。第三に、「法隆寺の本尊たる釈迦三尊は、聖徳太子のために作られたものである」という根本命題が、「物事を常識ではなく、理性によって判断すべき」という梅原氏自身の理念に反するものであった、ということ。」

そして、法隆寺の釈迦三尊像は九州王朝から移されたものである、という古田氏独自の見解をしめし、「西なる九州王朝産の釈迦三尊と東なる近畿分王朝産の薬師仏と、両々相対する金石文の存在する七世紀前半、これほど二元史観の非、多元史観の必然をあかあかと証する世紀はない。」とまとめています。

この古田氏の見解に対し、山崎仁礼男氏が「蘇我王国論」の中でコメントしています。

山崎氏は、「法隆寺釈迦三尊像の光背銘については、『上宮法王』は蘇我馬子であ

り、『法興年号』は蘇我氏の私年号と考えるので、この部分については古田説に従わない。」とします。その理由として、聖徳太子には多くの寺院の建立が伝えられており、これらを個々に架空であると論証することは不可能である、ということをつけています。薬師三尊像光背銘については、「この光背銘が後の時代の造作であること、本書と通説は完全に一致する。ただ通説には、これだけの大変な造作が何故なされたのか、一歩突っ込んだ問いが無い。」と述べています。

三氏の考察に対する私の見方をご紹介します。

私は、梅原氏の法隆寺論の中で、法隆寺再建が和銅年間であるという論には賛成していません。一方、釈迦三尊像光背銘が再建時に作られたという説には賛成できません。釈迦三尊像光背銘には日本書紀に記された天皇名が出てこないこと、聖徳太子の死亡年月日が日本書紀と異なっていることが理由です。梅原氏自身も仏像が法隆寺再建時に他の寺から移設されたことを考察していますが、古田氏が指摘したように仏像が作られ他の寺に設置された時点ですでに光背銘が作られていたと考えるべきであろうと思います。

しかし、釈迦三尊像が九州王朝から移されたとする古田説には同意できません。釈迦三尊像光背銘については、山崎氏が考察したように蘇我氏の寺から持ち込まれたものと考えの方が自然であると

考えます。太子の死は蘇我馬子と聖徳太子が「国記」「天皇記」を作成した後に生じたものです。「国記」「天皇記」完成以降も蘇我氏による歴史の記載は続いており、それが光背銘に記されていたと考えられる事ではないか、そのことによつて日本書紀と光背銘の聖徳太子死亡年月日の食い違いの説明がつくと考えます。

梅原氏は、多くの小金銅仏像が橘寺からもたらされたということが「聖徳太子伝私記」はじめ多くの文献に書かれていることを根拠に、釈迦三尊像が橘寺から移されたと推測していますが、釈迦三尊像は九州からではなく蘇我氏の鎮魂の寺とされる橘寺から移設された可能性が高いと考えます。

古田氏は、「古代は輝いていたⅢ」においては「九州から持ち込まれた釈迦三尊像」との対比の為に「東なる近畿分王朝産の薬師仏」という説を唱えています(但し、この説は後に変更されています)が、古田氏自身が考察しているように、釈迦三尊像と薬師如来像は違う年代に作られたものであり、その光背銘は独立した理由によつて記されたものです。

薬師如来像光背銘については、後代作られたものであり、梅原氏が考察したように、和銅年間の法隆寺再建時に他の寺にあった釈迦如来像に光背銘を付け加えることによつて薬師如来像に仕立て、薬師寺に対抗したという可能性が高いので

はないかと思われま

す。ところで山崎氏は、法隆寺の釈迦如来像については九州王朝から移されたものではなく蘇我氏の寺から持ち込まれたものであるとしながら、一方で「元興寺の丈六釈迦仏光背銘(元興寺縁起)」については九州王朝の歴史が後代に書き替えられたものという古田武彦氏の説に従っています。「上宮法王は蘇我馬子である」という「蘇我王国論」の立場からすれば、文林郎裴清が法興寺を訪問したという元興寺縁起の記事は、当然蘇我氏の功績が書き替えられたものと考えるべきであると思われま

すが、それが出来ていません。山崎氏は、「上宮法王」は蘇我馬子であるという一方で、「隋書に記された倭王『阿每多利思北弧』は九州王朝の王である」という古田説を否定出来ないため、『阿每多利思北弧』は蘇我馬子である」という考えまでブレイクスルーが出来なかつたと考えます。

しかし、古田氏自身は「古代は輝いていたⅢ」の丈六釈迦仏光背銘(元興寺縁起)考察の最後に補足として括弧付きで「原光背銘には、蘇我氏の功業が賛美されてあり、『新作光背銘』では、これらがカットされた、という可能性もありえよう」と付け加えています。山崎氏がその補足に気付けば、当然「元興寺の丈六釈迦仏光背銘(元興寺縁起)」は後代による蘇我氏の功績の改竄であるという見解に変わったのではないかと思われま

山崎氏は「蘇我王国論」第八章において、近畿の残る日本書紀成立以前のすべての金石文は後代に作成されたものであり、そこに記された天皇名はすべて日本書紀の記述を後付けしたものであると論じています。又法隆寺釈迦三尊像については、「上宮法王は蘇我馬子であり、法興年号は蘇我氏の私年号と考える」として古田説を否定しています。しかし、「元興寺の丈六釈迦仏光背銘(元興寺縁起)」については九州王朝の歴史が後代に書き替えられたものという古田武彦氏の説に従ったが為に、近畿に残る金石文によって蘇我氏の実績が改竄されているという視点が中途半端に終わっているように思われます。

古田史学では、日本書紀の記述と異なる史実を伝えている近畿に残る金石文は、九州王朝の存在の証拠であると考えています。一方で、日本書紀の記述と一致する内容を記した近畿に残る金石文は、日本書紀が一定の真実を伝えていることの証拠であるとも考えています。しかし私は、近畿に残る金石文については、各金石文が後代に作られたものであり蘇我氏の実績を改竄して日本書紀の記述を後付けしたものであるという考え方に立って各金石文を見直す必要があると考えます。

## 「熊野街道」(二五)

## ④本宮から大日越で湯の峰温泉へ

大日越(だいにちごえ)は熊野本宮大社と湯の峰温泉の間にそびえる大日山を巻いて進む古道です。湯の峰温泉は古来、熊野詣の疲れを癒し、身を浄める湯垢離(ゆごり)で、この道も古くから利用されてきました。距離は短いですが、本宮側からの大日越はかなり急な階段状の登りが続きます。石の階段や江戸期の石畳道、山の地道と変化に富んだ古道歩きが楽しめるコースです。

本宮大社前バス停から国道一六八号線の歩道を南へ二〇メートルほど進むと「是日本第一本宮大斎原」の石碑が立ちます。左折して細い路地に入り、出口の分かれ道まで来ると右手に大斎原の大鳥居が見えます。田んぼの中のまっすぐな道を大鳥居目指して歩きます。鳥居の高さ三四メートル、幅四二メートル。近くまで行って見上げると、その巨大さに圧倒されます。鳥居を潜れば大斎原の聖域です。木立の中の参道を進むと一段高くなつた敷地があり、広大な芝地の奥に二基の祠が祀られています。反対側に「一遍上人神勅名号碑」が立っています。

一遍には「一遍上人絵伝」に描かれた熊野詣に関する伝承があります。

一遍は遊行して南無阿弥陀仏の札を

配り歩いたが、その意義に疑問を持ち本宮参籠した。すると夢に熊野の神が現れ「浄不浄・信不信を問わず札を配るべし」と告げ、一遍の迷いを断ち切ったという。

一遍を開祖とする時宗ではこれを「熊野成道」と呼び布教に活用しました。本宮大社主祭神の本地仏が阿弥陀仏であることと関連付けられた伝承です。

大斎原を出て、昔は裾をぬらし徒歩で渡ることが禊となった音無川を、今は小橋で超えます。階段を上がり鳥居を潜つて国道一六八号線に出ると左折し、少し南下すると岩田橋を渡つたところに「世界遺産熊野古道 大日越」の道路標識があります。Y字路で右折し道路を少し進むと左手に手摺のない低い階段があり、それが大日越の登り口です。石で仕切つた階段や石畳の道は江戸期に参詣者の急増を受けて整備されたものです。かなり急ですが古道感はたっぷりです。やがて熊野本宮大社の末社、月見ヶ丘神社に着きます。本宮の例大祭に先立ち湯登神事で舞を奉納するところです。神社を過ぎると道は平坦になります。かすかに「興国三年」と読める銘の入つた名号碑と岩肌彫られた鼻欠(はなかけ)地蔵があります。

ここから先はなだらかな下り道となり、二〇分ほどで湯峰王子です。湯峰王子は温泉が信仰の起源となる社です。元は「湯の華化石薬師」を本尊とする東光寺に隣

接していましたが、明治の大火で焼失し、現在の場所に移転しました。古道を下りると石橋「壺湯橋」に出ます。ここが湯の峰側の登り口です。その横に小栗判官伝説で有名な「つぼ湯」があります。

小栗判官伝説については、ハンセン病との関係で考えてみましょう。

第二次世界大戦まで有効な治療薬がなく、「不治の病」と言われてきたハンセン病でしたが、一九四三年アメリカでプロミンという特効薬が開発され、その後も次々と新たな薬が開発され、劇的な症状の改善がみられるようになりました。患者の体内から細菌が死滅する「治癒」状態(治つた人)が当たり前となり、現在の日本では、ハンセン病はほぼ制圧された病気になっています。

ハンセン病というのは、「らい菌」による細菌感染症の一種です。手足の末梢神経に巣くって、手足の知覚マヒや結節などの症状をもたらします。知覚マヒから、火傷を負ったりけがをしたりして手足を欠損する、いわゆる二次的障害をよく引き起こします。傷も治りにくく、そういった外見の症状が、病気の実態よりも恐ろしさを過大に伝えていた面があります。かつては、「らい病」と呼ばれ、長く人々の差別と偏見の対象となってきた病気でした。

明治時代以降、国による政策として、それまで差別はあるものの、社会の片隅で静かに生きることを許されてきた患者

たちが、突然社会の厄介もの、恐ろしい病原菌扱いされ、徹底的に社会から、地域から、家族から、隔離政策によって、切り離されてきました。

江戸時代までは、外見による病氣そのものに対する偏見と迫害はありましたが、一方で憐みの対象でもありました。

熊野の唱導に従事した時宗の徒は、ハンセン病患者の救済をテーマにした説経「小栗の判官」をつくって、時宗と熊野を宣伝したのです。それは、ハンセン病を不浄と考え、天刑と考えていた時代には、驚くべき発想でした。しかしい、それは苦しめる者、虐げられた者にこそ、神仏の恩寵はあるという宗教の神髄を含んでいましたし、その底を流れるヒューニズムは中世の人々に心を深く打ったに違いありません。その物語に純情な照手姫をもつてしたので、ほのぼのとしたロマンチズムの漂う名作となりました。

堺市や岸和田市、貝塚市あたりで、旧熊野街道のことを小栗街道と呼ぶのは、そのようなロマンチックな名作に由来するのでしょうか。小栗判官と照手姫のロマンスほど、人々の熊野へのあこがれをそそったものはなかったのでしょうか。

より詳しく知りたい人は、「熊野詣」(五来重(ごらいしげ)著、一九六七年、淡交新社)を参照してください。二〇〇四年に「熊野詣」が講談社学術文庫で再編集して出版され、手に入るようになってきます。

## マルクスから学ぶ(6)

成瀬 和之

「政治の逆立ち」について、さらに考えていきましょう。前回にカール・マルクスの「ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日」を取り上げたときに、「今日の日本でも、悲劇的な死を遂げた幕末の英雄、坂本龍馬らの活躍をほんの上っ面だけまねた集団が時代錯誤の『維新』を標榜している」と書きました。

「誰がハシモトを権力の座に押し上げたのか？」社会学者の上野千鶴子氏は次のように問いかけています。(「ハシズムの不吉な風」、『ハシズム！橋下維新を当選会見から読み解く』第三書館、二〇一二年一月、所収)

「女と若者」が橋本を権力の座に押し上げたと言つてよいのだろうか？ なぜなら女と若者が浮動票の多くを占めるからだ。そして若者は、ネオリベ(ネオ・リベラリズム、新自由主義)改革から、もつともワリを食ったひとびとの集団である。小泉郵政選挙の皮肉は、小泉改革からもつともワリを食うことがわかっていひとびとが、小泉に熱狂したことである。このひとたちはたんに無知でたまされやすい有権者なのだろうか。

今回は、橋本徹的政治手法の基本的な手口とその手口への対抗方法を一緒に考えてみましょう。

第一の手法は、悪役・悪玉・敵役を意図的に捏造して、そこに攻撃を集中させるといふ手法です。

「公務員たたき」は多くの人々を扇動するときの常套手段です。公務員は有権者の支払う税金で安定した給与を得ているという構図を誇張し、それがあたかも不当な「既得権益者」であるかのように描き出します。

この手口が最も大規模に仕掛けられたのが、二一世紀初頭の二〇〇五年の小泉純一郎元首相が行った「郵政民営化選挙」でした。「郵政民営化イエスかノーか」という二者択一に選択を落とし込んで、それに反対する候補者のいる選挙区には「刺客」を送り込むというやり方です。ことさらに悪玉を仕立てあげて、マス・メディアで大宣伝をして、選挙で優位に立つという橋下徹的政治のやり方は、小泉純一郎元首相の「小泉劇場」の焼き直しです。

一九九〇年代末までにピークに達した金融崩壊以後の不況とリストラの嵐の中で、自民党の「旧守派」を悪玉にして、「自民党をぶっこわす」と言つて、二〇〇一年四月の自民党総裁選に立候補し、圧倒的支援を受けて首相になった小泉氏は、あたかもそれが「白紙委任」であつ

たかのように新自由主義(市場原理主義)的政策を一気に押し進めていきました。

新自由主義的政策の一つは、労働者の賃金や労働条件など、国の法律で加えていた規制を、企業の負担を軽減する方向で解体していく「規制緩和」です。

もう一つは、年金や医療といった、社会保障を削減することで、企業負担を減らそうとすることです。

現在働いている三人に一人以上(二〇一九年現在で三八・三%)が非正規雇用労働者です。多くの若い人たちが貧困と格差に苦しんでいる要因は、その多くが小泉政権の時につくられています。なお、小泉政権の内閣府特命担当大臣、総務大臣を歴任として小泉政権の政策推進にあたったのが竹中平蔵です。その政策の恩恵を最も受けている人材派遣会社、パソナグループ取締役会長でありながら、現在も菅政権の内閣府日本経済再生本部産業競争力会議の民間議員に現在も居座り続けていることは忘れてはならないでしょう。

小泉政権も「悪玉づくり」の名手でした。二〇〇二年九月一七日の「日朝平壤宣言」の際に「北朝鮮」側が拉致の事実を認めたことをきっかけに、マス・メディアで反「北朝鮮」キャンペーンが大々的に行われ、「北朝鮮」を仮想敵としてアメリカと一緒に戦争を行いうる日本にする法律がつくられ、戦場であるイラク

に自衛隊を派遣するところまで対米従属が加速されました。

その政策と手口は安倍前政権にも引き継がれています。二〇二一年七月一日付の「しんぶん赤旗」で陸上配備型迎撃ミサイルシステム「イージス・アショア」（陸上イージス）の破綻後も導入経費を支払い続け、今年三月で二七七億円に達したと一面トップで報道されました。トランプ前米政権の「米国製武器爆買い」要求を受け、安倍前政権が二〇一七年一月月に二基の導入を決定したものです。

新自由主義のキーワードは「自己責任」です。「自己責任」論の呪縛の中におかれている人が、「私の暮らしはどうしてこんな悪い状態になってしまったのだらう」と、現状の原因や理由を問うた場合、どうしても「自分がいけなかったのではないか」という自己反省にはまっています。まじめな人であればあるほど、政治や社会の問題として考えるよりも、自分に問題があると考えてしまうのです。そうしたら気持ちが悪く落ち込むばかりで出口はありません。

そんなとき、「悪いのは教師と公務員だ！」と単純明快な「悪玉づくり」を大きな声で言ってくれる人がいると、それだけで落ち込んでいたのが救われた気持ちになる人も多いと思います。「悪いのは教師と公務員だ」「悪いのは憲法九条だ」と言ってくれるだけで、「あなた

は悪くない」というメッセージを、有権者に与えられるわけです。

ここには、ある意味でメッセージの正否が問題にならないという特徴が生まれます。ですから、現状の分析や、それに基づいた政策がどんなにデタラメでも、橋下徹的「悪玉づくり」をやっているだけで、扇動者本人は自動的に「善玉」にしあがり続けられるわけです。いじめの構図や五段階相対評価の教室で「他者を貶めること」によって自分の成績を上げようとする「構図と似ています。

橋下氏が「教職員組合や職員が憲法九条の価値観を徹底して叩き込んできたじやないか」（共同通信、二〇一二年三月五日）と言うのは、すでに作っておいた「悪玉」に別なものを憲法をはりつければ、すぐにそれも「悪玉」化するという単純な手口です。こうしたやり方に騙されてなりません。

同様の手口は今日でも行われています。安倍前首相が月刊誌「Harada」8月号の桜井よしこさんとの対談で、東京オリ

ピックに反対する人々を「反日と批判される人たち」などとくくってみせた問題です。「彼らは、日本でオリピックが成功することに不快感を持っているのではないか。共産党に代表されるように、歴史認識などにおいても一部から反日的ではないかと批判されている人たちが、今回の開催に強く反対しています」というのです。毎日新聞の世論調査（六月一

九日）では「中止」「再延期」が計四二％、読売新聞（六月四日～六日）でも「中止」が四八％です。開催に否定的な声は、みな「反日的」なのでしょう。共産党

は「悪玉」に「五輪開催反対」をはりつけて「反対意見を抑え込もう」としているのです。いつまでも、このような手口に日本国民が騙され続けると思っているのでしょうか？そろそろ、選挙で決着をつける時がきています。

### 【「ふみの道草」38の続きです】

人間のよさのようなものを感じたのでしよう。

「九州もなかなかいいじゃないか、熊本も、どうして素晴らしい人がいるようだよ。ハーンの心は、急速に熊本に対してひらいて行くのでした」

「そして、この熊本で、ハーンはもうひとつの新しい人生を迎えることになるのです」（長男・一雄の誕生）

この回の圧巻は、何と言っても立て板に水、新しい日本を象徴するかのようになまけく立てる、伊丹十三演じる佐久間英語科主任の言動でした。こういう役をやると右に出る人はいません。惜しい人を失くしたものです。

### 俳句

土田 裕

遠忌かな母の風鈴語りだす  
入道に従ふ家来雲の峰  
万緑やかたて歩荷の塩の道  
草いきれ不法投棄の注意札  
敗戦の一句八十一の夏

影山 武司

長梅雨やノアの方舟出るらしき  
夏草の鉄路の錆を隠しをり  
白シャツの背の漲る野球場  
ときめきの泡のぶつかるソーダ水  
潮の香を持ち帰るたる水着かな  
天窓の曇り硝子や金亀虫  
箱釣の水の隙間に捕へけり  
箱釣の裸電球影も揺れ  
少年の胸に秘め事祭笛  
朝戸より塊のごと蟬時雨

### 編集後記

SK生

「静脈の浮き上がり来る酷暑かな」（横光利一）。炎暑の中の五輪も終わり、予想以上にコロナ患者は急増している。相も変わらぬ無能・無策の政府。多くの庶民の静脈を浮き上がらせているのは今夏の暑さだけではあるまい。蟬時雨のかまびすしき中、いよいよその思いがつのる。

モット高ク『日本の面影』(続)

服部の声「新しい任地は熊本でした。

熊本第五高等学校です。高等中学というの、三年間の中学の上につくられた二年間の学校です。月俸は一挙に倍の二百円。冬も松江に比べてはるかに温かいはずでした」

「松江を去るハーンの見送りは、のちのちの語り草になるほどでした。わずか一年二カ月の松江滞在でしたが、ハーンにも松江の人々にとつても、忘れ難い思い出となつたのでした」

(熊本はしかし、ハーンに「新しい日本」の耐えがたい現実を突きつける。第五高等学校応接間に)

ハーン「窓から外を見ていて、振りかえり、日本語で」ハイ

佐久間「(入ってニコリと笑い、英語で) こんにちは、英語科主任の佐久間です(ドアを閉め、英語で)校長、教頭とは、お逢いになったそうで？」

ハーン「はい」  
佐久間「(英語で)よくおいでになりました(と手をさしのべ)お待ちしていました」

ハーン「(日本語で)アリガトウ(と握手)」

佐久間「ハハ、大分日本がお気に入りとか、どうぞ、お掛けを(と掛けてしまい)ハハハハ」

ハーン「(日本語で)ハイ(と肌合わぬ相手だと思いつつ掛ける)」

佐久間「日本人として、外国の方にわが国をおほめいただくとは喜びの限りですが、いやいや、日本はこれで、なかなか、厄介な国家、民族でしたね」

ハーン「ー」

佐久間「果たしてそんなにほめたもんか。分かったもんじゃありません」

ハーン「ー」  
佐久間「あ、しゃべり方が早すぎますか？日本語は、かなりお分かりと聞いておったもんですけん」

ハーン「(日本語で)分カリマス」  
佐久間「結構。そう、聞けば、来日一年にして、日本の婦人を妻(さい)に迎えられたとか、こらあ、早まったかもしれませぬぞ。ハハ」

ハーン「(不快で、目を伏せる)」  
佐久間「いや、こらあ失礼、おそろく松江の日本人には、こんな無礼なことをいう人間はおらんだったでしょうが、わしらは、悲しいかな、都会のシニクな物いいが身についてしまつておる。ま、妙な遠慮をして、陰でコソコソいうとるより、よほどマシだと思つとり

ます。お互いに、率直でありたい(英語で)お分かりですか？」

ハーン「(日本語で)分カリマス」

佐久間「結構。寒さをさけて熊本へおいでたとか、これは間違ひ、九州ならあつたかだらうと思うのは浅慮の極みでしたなあ、今日も、寒い。どんどん寒うなります。熊本は寒かですばい。ハーンさん」

ハーン「(日本語で)ソウデスカ」  
佐久間「ハハハ、どうもいきなり無礼な嫌味ばいとりますが、これは私の性癖でしてなあ、日本はよか、古き日本ワンダフルなどおつしやる西洋の方と遭うとわざとこのように嫌味な日本人を装いとうなる。これからの日本はああた、素朴だの純粹だのといつちやあおられません。否応なしに、私のごとく、西洋かぶれの軽佻浮薄な人間にならにやあならん道を歩くのです」

ハーン「ー」

佐久間「それに大体、古き日本人ぞというもんは、ちつとんようはありまつせん。中へ入りやあ、ひどかもんでね。まず貧困あり、迷信あり、婦人蔑視、嫁いびり、村八分、衛生状態は最悪、地主横暴、百姓に至つては、個人の個の字もなか、いくらでも改良革命していかにやあならんもん満ちておるのです(と立つて)」

ハーン「ー」

佐久間「(窓に立ち)熊本をご覧になったですか？ここは、十四年前に西南の役ちゆう戦場の舞台となりましてですなえ」

(回想して)

佐久間「古き日本とやらが、どんどん焼け落ちてしもうたんです。従つて、おそらく西洋の方のお気には召さん新しいまがいの西洋建築があちこちに建ち」道はほこりが風に舞い、気の荒いのが跋扈して、いうてみりやあ、嫌なところすたい、ハハハハ」

(ハーンの部屋)

ハーン「(ランプの下で机に向かい、しかし、ペンを持ったまま動かない)」

(新しい日本に幻滅を覚えながら、しかしまた、夜更けに隣家に押し入つた強盗の顛末にハーンは：)

服部の声「ハーンは、隣りの老婆が好きになりました。強盗のこともいくらか気に入つていたようです。ただ自分の欲を押し通すだけでなく、押し入つた先の事情や人柄を重んずる強盗に、なにかつかしいもの、西洋からはもとより日本からもどんどんなくなつていく、

(この文章の続きは十五ページ中段にあります)